



平成22年度の内水面研究所スタッフ紹介



研究所の施設（庁舎・飼育実験棟と防疫池・小型実験池・ふ化室と倉庫）

【新人紹介】



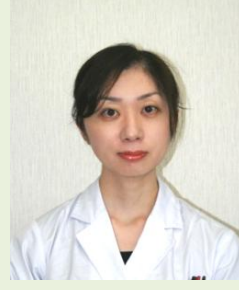
生産管理部 主任研究員 前田 穰
美味しく、成長が良く、品質がそろったニジマスの大量生産を実現するために、雌性発生や染色体倍数化などのバイオテクノロジー技術を用いて、優良品種の作出に取り組んでいます。



生産管理部 主事 藤田 佳子
庶務一般を担当しています。
明るく楽しい職場になるようにお手伝いできたらと思います。よろしくお願いします。



調査研究部 研究員 大水 理晴
青森県で漁獲されるサクラマスの増殖事業に関する研究調査を行っています。精一杯頑張りますので、よろしくお願いします。






調査研究部 研究員 雫石 志乃舞
青森県の内水面（主に湖）の環境調査を行っています。また、本県内水面漁業の主力魚種であるヤマトシジミについて、安定生産対策などを担当しています。

内水面研究所は、独立行政法人としてスタートして2年目を迎えます。
今年も内水面研究所の敷地内にある梅、桜、ツツジ、菖蒲、アヤメ、スイカズラが次々と咲き、季節の移ろいを感じさせてくれました。更に、カワセミ、オオヨシキリ、ウグイス、カッコウが鳴き、自然の豊かさを毎日実感しています。
昨年は事務所前の雑木林にカモシカが現れ職員をびっくりさせました。
本年度、内水面研究所には新人が4名配属されました。また、生産管理部、調査研究部の両部長は、副部長から昇任し、内水面研究所は若干若返っています。今後とも青森県内水面漁業の持続的発展のために職員一丸となって頑張りますのでよろしくお願いします。（尾坂）

平成22年度の職員配置と主な業務

内水面研究所は、県内の内水面漁業、養殖業の維持発展を目的に増養殖技術開発や技術相談、河川湖沼の環境保全などの調査研究を行っています。

地方独立行政法人青森県産業技術センター内水面研究所

<p>所長</p>  <p>尾坂 康</p>	<p>生産管理部</p>  <p>榊 昌文部長</p>	<p>○水産動植物の増養殖に関すること</p> <p>○水産動植物の種苗の生産及び供給に関すること</p> <p>○内水面における魚病の調査、予防に関すること</p> <p>○庶務に関すること</p>	<p>養殖衛生管理体制整備事業、魚類防疫技術試験、庶務等に関すること</p> <p>売れるマス類生産技術開発事業、県産あゆ資源造成事業、モクズガニ養殖実証試験等に関すること</p> <p>飼育魚の継代飼育、種卵・種苗の供給等に関すること</p> <p>KHV 診断、飼育施設の整備、公用自動車の管理等に関すること</p> <p>サービス、歳入、予算執行、決算、公有財産の管理、物品管理、安全衛生管理等に関すること</p> <p>庁舎の管理、物品の管理、文書の收受、郵便物の発送等に関すること</p>	<p>榊 昌文</p> <p>前田 穰</p> <p>沢目 司</p> <p>松田 忍</p> <p>藤田 佳子</p> <p>菊池 美弥子</p>
	<p>調査研究部</p>  <p>長崎 勝康部長</p>	<p>○水産資源の開発調査に関すること</p> <p>○水産動植物の増養殖指導に関すること</p> <p>○水質及び底質の調査に関すること</p>	<p>しじみ増殖技術開発事業、実用技術開発事業（シジミ）、予算編成他部に属しない事務等に関すること</p> <p>さけます資源増大対策調査事業（さけ）、十和田湖資源対策調査事業、東通原子力発電所温排水影響調査等に関すること</p> <p>さけます資源増大対策調査事業（さくらます）、日本海さくらます資源再生事業等に関すること</p> <p>しじみ安定生産対策調査事業、漁業公害調査指導事業等に関すること</p>	<p>長崎 勝康</p> <p>相坂 幸二</p> <p>大水 理晴</p> <p>雫石 志乃舞</p>



アユはその姿の美しさと独特の食味から、釣り人はもとより一般の方からも人気があり、内水面の重要魚種となっています。

これまで青森県内では、鱒ヶ沢町が運営するアユ増養殖施設が唯一の種苗生産施設であり、ここで生産されたアユの稚魚が地元の赤石川はもちろんのこと、県内各河川に放流されてきました。しかしながら、生産コストが種苗生産を継続していく上での障害となっており、低コストでの生産方法の確立が必要となりました。そこで、県・鱒ヶ沢町・栽培協会とともに、21・22年度の2カ年間で効率的な種苗生産を検討することを目的とした本事業を実施しています。

今回は、平成21年度に内水面研究所で行った早期成熟試験結果について紹介します。種苗生産に用いるアユ親魚の成熟を早め、通常よりも早い時期に採卵することができれば、体長50mm程度までの初期育成期間において、海水温が通常より高めの時期となることから、水温調整に要するコストを削減することができます。試験は、室内で照明時間を調整した区(明るい時間4時間・暗い時間20時間、短日処理と呼ぶことにします)と屋外の自然の日照時間とした区(無処理と呼ぶことにします)を設け、それぞれのアユの生殖腺の変化を見ました。試験期間は7月1日から9月30日までの91日間です。

試験の結果、短日処理により雌及び雄とも無処理のアユに比べ、1ヶ月間程度成熟が早まることが分かりました。(図1)

しかし、個体毎の生殖腺指数を比較した結果、短日処理をしたアユは、早期に成熟する個体もある一方しない個体もあり、まとまった成熟を示しませんでした。無処理のアユは飼育の経過に伴う魚体重の増加とともにまとまった成熟を示しました。(図2)

今回報告した試験では、6月30日までは湧水(水温12℃)で飼育し、短日処理などを開始した7月1日から加温水(水温18℃)としたため、試験に用いたアユの成熟度が低く、結果として短日処理でのバラツキの原因となったと推測しています。

平成22年度は成熟の進行程度を揃えることを目的に、飼育用水を湧水から河川水へ変更し、短日処理開始段階での成熟度を高めたアユを用いた試験を実施しているところです。

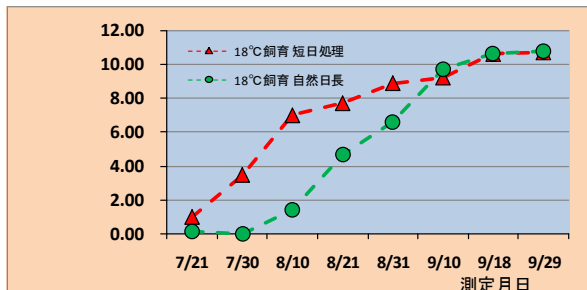
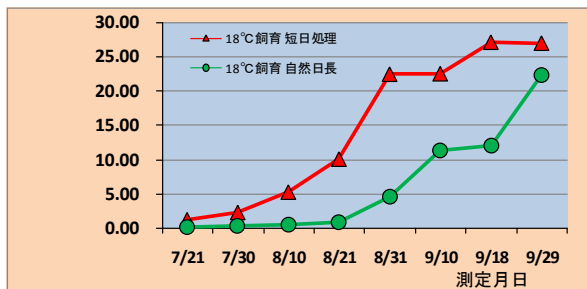


図1 生殖腺指数の推移

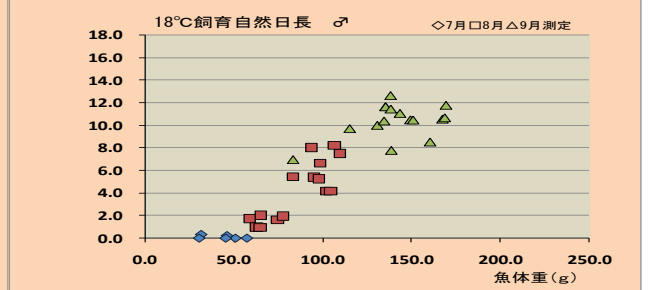
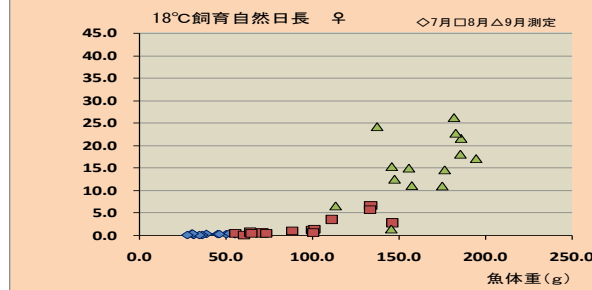
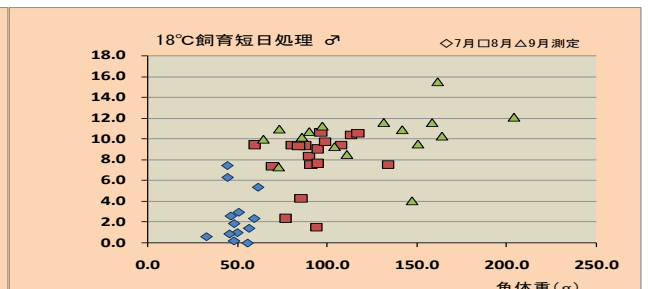
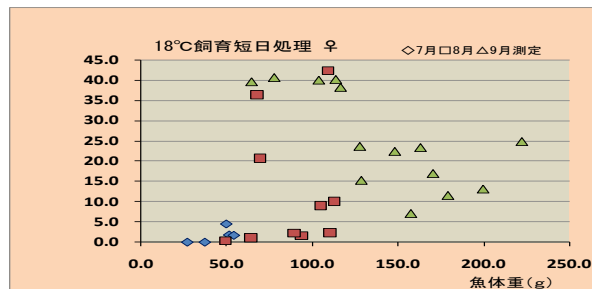


図2 月別・魚体重別生殖腺指数の関係

わかいやすい魚病シリーズ(4) [水カビ病]みずかびびょう

【水カビ病(卵)】

当研究所では、6月中旬から電照処理(明暗の時間を変える)により成熟を早めたニジマスの採卵(通称:夏卵)が開始しています。

採卵後の卵管理で問題になるのが、水カビ病の発生です。

水カビ病は、ミズカビ科真菌のミズカビ属、ワタカビ属、アフアノマイセス属などの感染を原因とする魚類の感染症の総称です。

サケ科魚類に発生するものはミズカビ属、熱帯魚などの淡水魚に発生するものはワタカビ属またはアフアノマイセス属であることが多いとされています。

水カビ発生メカニズムを簡単に表すと図1のようになります。生卵は呼吸と排泄により微小な水流(生物的自然対流)が発生していますが、死亡することによって対流が乱れ、水カビの胞子が寄生し易い状態になります。綿毛状に繁茂した菌糸は生卵を取込み集塊(写真)となってふ化槽内の水の流れに偏りが生じ、その結果ふ化槽内で部分的な酸欠状態を引き起こします。

水カビ防除薬は、水産用医薬品として「パイセス」が承認されています。また、薬品を使用しない方法として、適期での卵攪拌、銅ウール、ナノフィルター、抗菌加工したふ化盆等があります。いずれも、使用方法を間違えると効果が半減したり、死卵を増加させることがあるので注意が必要です。

最も重要なのは良質の卵を確保することです。健康な親魚育成は勿論のこと、採卵時と親魚並びに卵の取扱い(受精、吸水、収容等)を丁寧に行うことが大切です。



死卵に寄生した水カビが生きた卵を巻き込む

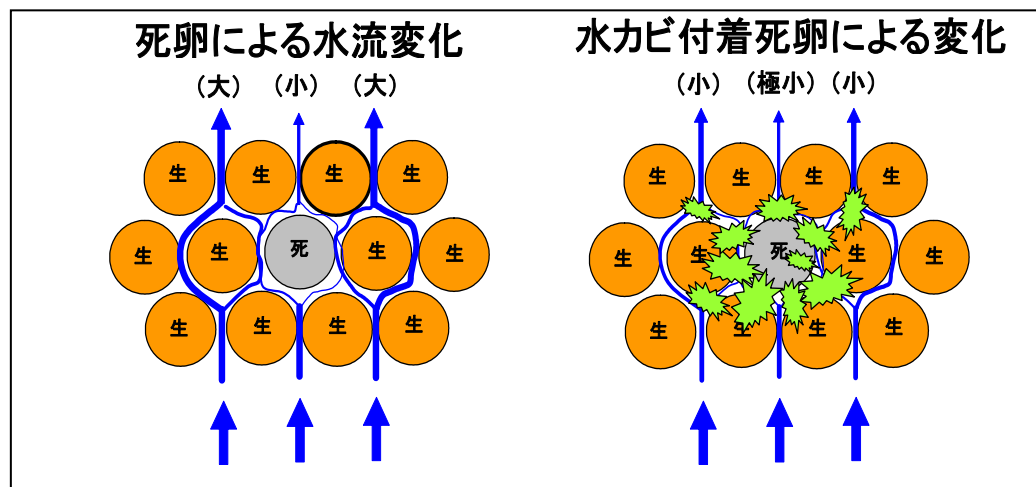


図1 水カビの寄生による卵への影響(模式図)



1. さけますふ化放流事業の思い出

内水面研究所の尾坂所長から内水面研究所だよりに掲載するので投稿して欲しいとお願いされ、さけのふ化放流事業に携わってから30年を経過し、これまで多くの各増殖河川の組合長さん方との思い出や、恥を忍んで私がこれまでさけますふ化放流事業(増殖事業)で経験した失敗例や増殖事業に対する思いをご紹介したいと思います。なにぶん30年前を思いだしながら書いていますので、数字等多少の違いをお許し願います。



2. 私の経歴

私は、昭和52年・53年当時北里大学水産学部の学生として岩手県大船渡市の盛川や釜石市の片岸川でさけのふ化放流技術を学ばせていただきました。当時の両河川はさけが既に数万尾遡上し、数千万尾のふ化放流を行っておりました。

その後、昭和53年度にむつ市川内町(旧川内町)に町営の約250万尾放流規模のさけますふ化場が完成し、私は大学を卒業後、昭和54年4月に川内町職員に採用され、ふ化場の運営を担当することになりました。以来平成5年度・6年度の2年間で除き平成16年度まで約20年間にわたって直接・間接的にさけますの増殖事業に携わってまいりました。

3. さけふ化放流事業で経験した失敗例等

○町営ふ化場の施設・ふ化用水等の概要

私が運営を任せられた町営のふ化場は、ふ化槽がアトキンス式ふ化槽、ふ化用水は地下100mから自噴した毎分約300リットルの無酸素の水温20度の温水と農業用の水路から取水している河川水とを混合し利用している状況にありました。飼育池(養魚池兼用)は、長さ約20m、幅1.8m、高さ50センチが5面あり、正直私が学んだ岩手県から見ると旧式の施設でありました。大学を卒業したばかりで何も分からない私の事業での苦闘がここから始まりました。その数例をご紹介します。

その1

○昭和54年当時、さけは川内川に現在の150分の1、約100尾程度の遡上数しかなく、ふ化場への卵の收容は、移入卵と東通村尻労から海産親魚を運び採卵する計画でありました。私と同僚の徳田氏と二人で、川内町漁協から2トントラックを借り、12月下旬の雪道を往復4時間かけて尻労まで海産親魚を取りに行き、川内のふ化場で採卵、受精作業を行いました。しかし、メスは死んで数時間経っても、受精率は下がりますが使用可能としても、オスは死んで2時間以上を経過し硬直した親魚を受精に使用せざるをえない状況にあり(当時尻労は、大量にさけが獲れ現場は戦争状態)、苦勞して冷たい水の中で受精したはずの卵は、その後いっこうに発眼することがありませんでした。

(海産親魚の搬入を途中で中止)

その2

○昭和55年1月に、ふ化場へ岩手県の津軽石川から移入卵を收容し、ふ化直前に養魚池に卵をばらまきました。しかし、31日に大雨が降りふ化用水は河川水を使用していた関係から、濁水が池に入り、卵は泥に覆われ真っ黒い状態になりました。経験のない私は、不安でたまらない思いでしたが、その後卵はなんとか泥に負けずふ化し、どうにか最悪の状況はまぬがれることができました。

その3

○昭和55年の1月・2月に川内では一晩で1メートル近く雪が降る時があり、取水口が雪で覆われ水が流れてこないのではないかと不安にかられ、夜中の1時に起きて車で約4キロ離れたふ化場入り口まで行き車を置き、そこから歩いて腰まである雪をかき分けながら約500メートル先のふ化場にどうにかたどり着き水が流れていることを確認し、さらに300メートル上流にある取水堰堤まで水が流れてくるのを確認するために、暗闇の杉林の中を雪をかき分け進みましたが、林の中から突然光る物体が現れ、幽霊か魂ではないかと髪の毛が逆立つ思いもしました。(光る物体はカモシカの眼でありました。)その後恐怖と戦いながら、水が流れていることを確認し、逃げるようにその場を立ち去りました。

その4

○いろいろなことがあり、どうにか稚魚を放流できる状態までにし、いよいよ1週間後に放流という時に、4月中旬の日曜日にまたしても大雨が降り一瞬の油断から、自宅からふ化場に駆けつけた時すでに、ふ化場は農業用水路からの水であふれ、池は完全に冠水しており、当然稚魚も下流の水路や一部田んぼ等に流されてしまいました。田んぼの持ち主が町議会議員に報告したため、次の日私は課長に呼ばれ「君はさけ稚魚を田んぼに放流したのか」とお叱りを受けることになりました。

その5

○また、ふ化場を運営し数年後には受水槽に泥が溜まり、揚水用のポンプが機能せず、水が配水槽に揚がらない状態とふ化槽に温水と河川水が混合された水が供給できない状況になり、いよいよ困り追い詰められ、私は悩みに悩み、考えに考えました。そして、アトキンス式ふ化槽を一部増収型に改良し、さらにふ化槽を取り外し、養魚池に並べ、その上方のふ化槽の排水路を活用し、温水と河川水とが混合され水温が8度になるように木の板で水路に加工を施し(水が流れる隙間を狭くし、温水と河川水が混じるように工夫した)、この用水が養魚池に並べた増収型に改良したふ化槽に入るようにし、どうにか事業が行えるようにしました。

ふ化場の運営は、正直稚魚の放流が終わるまで約半年間ほとんど休みがなく、昼も夜も神経が休まる暇がありませんでした、少しオーバーではありますが、当時私は全身全霊を尽くして事業に取り組み、このため放流を終えると精根尽き現実から逃げるように、川内から離れ旅行に出かけました。

今でこそ、秋には県内の各増殖河川に20万尾前後の大量のさけが、当たり前のように遡上し半数近くのふ化場が自前で河川卵をふ化場に收容できるようになりましたが、私が事業を担当した昭和54年当時は、まだ県全体で2万尾弱の遡上数しかなく、卵をある程度自河川卵で收容できるふ化場は奥入瀬川に限られていました。



町営さけふ化場(昭和53年撮影)



さけふ化場の内部



アトキンス式ふ化槽



4. さくらます増殖事業での経験

一方さくらますの増殖についても、多くの苦い経験をしました。さけのふ化放流事業がどうか軌道に乗り始めた昭和59年に、川内川中流域に町営の淡水魚（やまめ等）の飼育池が完成し、そこでさけの次はさくらますの増殖をめざすべく飼育放流に取り組みました。施設はここでも河川水を飼育用水として使用しており、さらに施設には沈殿池等が無い状況にありました。このため、雨が降る度に各池の取水口に木の葉、木の枝、土砂等がつまり取水口をふさぎ、水が流れない状況が頻繁に発生し、夜中に大雨が降ると川内川でも約5時間後には増水し、その後は15分毎にゴミ（木の枝・この葉等）を除去しなければ、池に水が入らず、魚がへい死してしまう状況にありました。

このため、事故も発生し、多い年では、年間40日も夜間当直をつけて池の管理を行いました。私も雨が降る度に、夜も安心して眠ることができず、自宅から7キロ離れた池に一晚に5回も通うこともありました。（夜等に池の管理だけのため、約15年間に私や長谷川元組合長の車の走行距離は数万キロになったと思います。）

また、数年に一度の大雨により、川内川が氾濫し飼育池、管理小屋は完全に冠水し、管理している側の人も逃げなければ危ない状況になり、数万尾のサクラマス稚魚、幼魚等が川内川等に流されてしまったこともありました。（現在施設は整備済み）

さらに、追い打ちをかけるように数多くの魚病も発生しました、細菌性鰓病、白点病、せつそう病、その他の魚病等多い時には1日に数万尾の稚魚がへい死し、次の日池を覗に行くのが怖いくらいで、へい死魚の取り上げに半日を要することがありました。へい死がいつ収まるか分からず、この時は正直「もうこれで10年以上努力してきた事業は終わったな」と心臓が潰れる思いでした。

度重なる危機的状況を、これまで長い間、多くの内水面試験場の職員の方々に助けていただきました、この場をお借りしお礼を申し上げます。

これらの苦難の中で事業を継続できたのは、一重に今は亡き元川内町内水面漁協組合長、長谷川巖氏の家庭を顧みず、人生の後半をさくらますの増殖のために一心に捧げる努力があったことを合わせて申し添えさせていただきます。私も長谷川元組合長のおかげで、意気に感じて仕事をすることができました。

【各組合長さん方等との思い出】

私は、さけますのふ化放流事業（増殖事業）に携わって30年が経ちますが、これまで多くの組合長さん方と接する機会があり、その思い出をご紹介します。

1. 老部川の相内元組合長さんからは、老部川にさけのふ化場を建設したく、30年以上も前に自民党の県議会の控室に下北選出の議員を訪ね直訴したことを聞かされた他、常にさけやさくらますの飼育用水確保に情熱を傾け、事業成功への探求心が非常に旺盛な方であり、老部川のさくらます増殖の基盤を確立したとっております。

2. 深浦町の追良瀬川の黒滝元組合長さんは、追良瀬川にさけやさくらますを増やすこと、事業を成功に導く一念で、さけます増殖に一生を捧げた方だと思います。北海道等への研修や先端技術の取り入れ、川内の元内水面組合長でありました長谷川氏とお互いがさくらますの増殖にかける思いで語りあっているお姿が思い出されます。

3. 野辺地川の佐藤元組合長さんも、野辺地川にさけを増やすことに執念と情熱を傾けた方であり、沿岸漁業や河川整備を担当する部署と戦った方もありました。昭和54年に野辺地川のふ化場から当時10万粒程度の発眼卵を分けていただいた際、もったいなさそうに話されていたお姿や、平成16年当時川内漁協のさけのふ化場にトラックで夫婦で受精卵を取りに来られたお姿が今も鮮明に思い出されます。私は、個人的に岩手県の片岸川から川内のふ化場に移植した卵の系群が川内に定着し、その一部が野辺地川に移植され今日陸奥湾に数万尾のさけが11月中旬から下旬を中心に回帰したことに繋がっているのではないかと考えております。（野辺地川固有の資源もあると思いますが）

4. 新井田川の山村元組合長さんも新井田川にさけを増やすことに情熱を傾けた方であり、川内町漁協のふ化場とはお互い、施設のあり方、移植卵のこと飼育方法等学びあいました。新井田川にさけの早期群を定着させた他、数万尾が遡上する基礎を確立された方だと思います。

5. 奥入瀬川の戸来元組合長さんは、よくさけます増殖協会の総会等でお会いしましたが、当時県の水産部長へ「十和田の戸来だが」と直接電話をされる豪快な方でありました。

6. 川内川でもさけますを増やすことに熱い思いと情熱を傾けた方がおります、川内にさけのふ化場を整備する方針を打ち出された今は亡き元川内町長菊池十一氏、昭和59年に川内町漁協単独で500万円を出し、ふ化用水を調査された他、昭和60・61年に約2億2千万円で一千万規模のふ化場を整備していただいた、同じく今は亡き川内町漁協の岡崎専務、私の後、昭和60年～平成15年まで漁協のふ化場を運営され、川内川へのさけの遡上を1万尾台に引き揚げた故堀幸男氏、さくらますでは東京の病院に入院しながら死の寸前まで事業が心配で現場の担当者に指示をだされた川内町内水面組合の長谷川元組合長等がおります。

それぞれの河川にさけますを増やすことを夢観、志半ばで亡くなった方、事業に成功した方等さまざまありますが、私は多くの方々の事業に賭ける熱い思いと努力を忘れることができません。

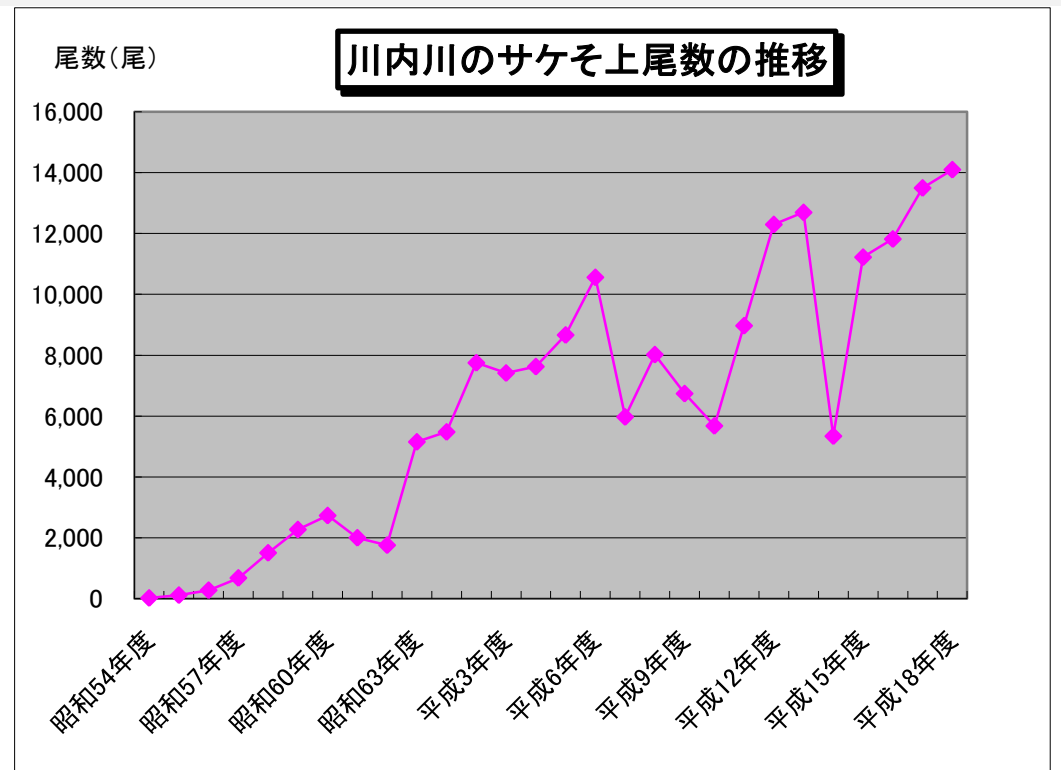
【川内川のさけの歴史について】

明治24年の川内村の村議会の議事録に、川内川に遡上したさけを川の区域ごとに分け（捕獲のための）入札を行い、その落札金額により、村の公共事業等を行っていたこと。当時既に川内川の一部にさけの捕獲を禁じた区域（種川制度）を設けていたこと。等が記録として残っており、さけの資源がいかに人間の生活に密接に関わっていたかを示した貴重な資料であると思っております。

また、約135年の歴史のある地元の第1川内小学校の校歌には、「川内川に魚おどる」と歌われており、明治35年生まれ私の祖父から川内川では「さけやますが河岸でざるですくえた」とか「川に棒を立てても転ばないくらいさけがのぼった」という話を聞かされたことがあります。

最後に私は、大学の卒業間際、研究室の井田助教授に「君が死んでも川内にさけのふ化放流技術を残さない」と言われたことを今でも覚えております。現在川内川のさけのふ化放流事業は、酒井清氏により真剣に行われており感謝しています。

平成22年7月21日の東奥日報の社説にさけの鼻軟骨に含まれるタンパク質と糖鎖から成る物質「プロテオグリカン」が医薬品や健康食品への応用が期待されると書かれてありましたが、さけますの資源が人間に恩恵を与え、地域の活性化に繋がることを心からお祈りし、私の駄文を閉じさせていただきます。



昨年の秋、ふ化場前には産卵のため1万3千尾を超える親魚が帰ってきました。

漁業者の手によって採卵、飼育されたヒメマスの稚魚が、去る6月18日（金）に「大きくなって戻ってこいよ」と大きな声をかけられ、子供たちの手により十和田湖に放流されました。

4月に解禁となったヒメマス漁は昨年を上回るペースで水揚げされています。休漁明け（6月20日から7月20日まで休漁）の水揚げも順調で7月末までの漁協取扱量は6,916kg（昨年同期1,981kg）で、過去5カ年と比較しても好調なのが分かります（図1）。

昨年放流された種苗も順調に成長しており、今秋以降も漁獲の対象となり、漁獲量の増加が見込まれます。「12月4日の東北新幹線全線開業により十和田湖へ訪れる多くの観光客の方々に新鮮なヒメマスを食べて欲しい。」と小林組合長始め組合員の期待も大きくなっています。

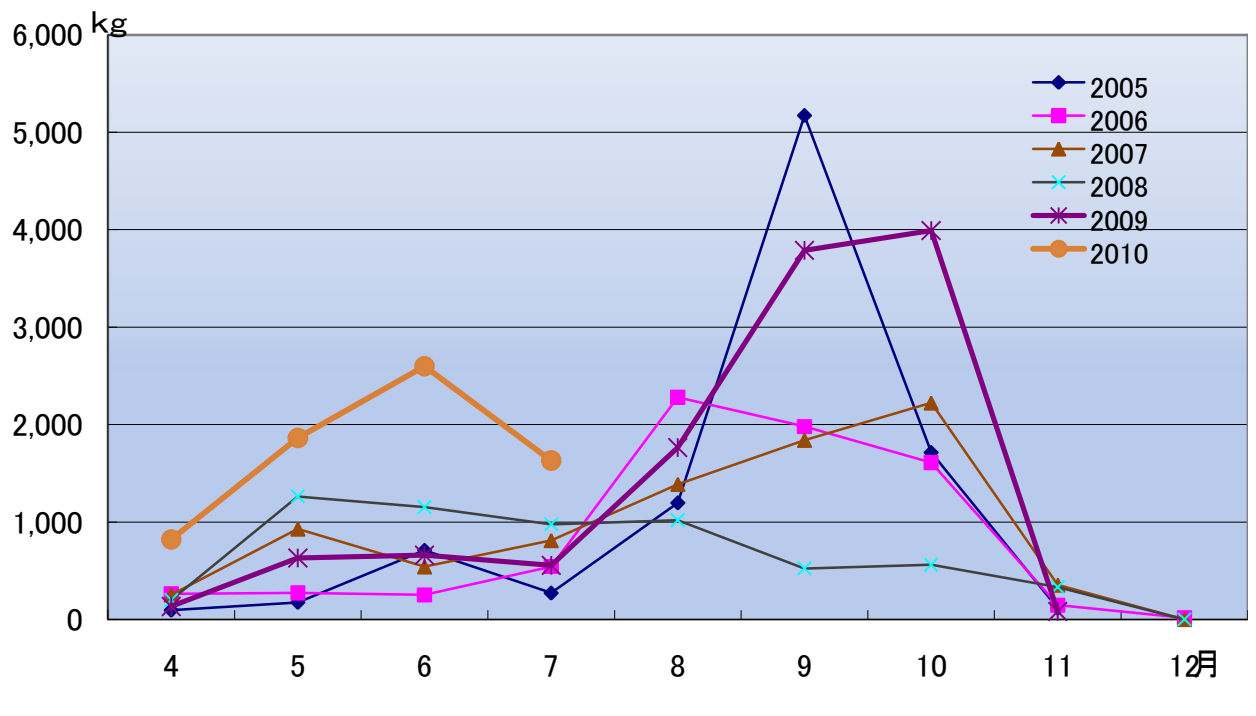


図1 ヒメマスの漁獲量の推移 (2006~2010年)



ヒメマス稚魚の放流式 (6月18日)



地元小学生によるヒメマス稚魚の放流 (6月18日)

サクラマス情報 シリーズ(1) はじめに

調査研究部

研究員 大水 理晴

青森県のサクラマスの年間漁獲量は、およそ250トン（漁獲金額で3億円前後）となっており、北海道に次いで全国2位を占めていますが、平成元年以降から減少傾向となっています。サクラマスは厳しい冬が終わりを告げる3月から新緑の5月一杯にかけて青森県沿岸域で釣りや定置網で主に漁獲されます。この時期のサクラマスは脂がのり、大変美味しく、市場では高級魚として扱われています。

サクラマスは、サケの仲間で、日本をはじめカムチャッカ半島西岸、沿海州、サハリン、朝鮮半島東部、北太平洋の北西部に生息し、日本では太平洋側の千葉県以北、日本海側の島根県以北の沿岸域や河川で見られます。サクラマスは生まれた川で約1年半過ごし、春に海にくだり（降海）、オホーツク海付近を回遊・成長し、1年後の春、サクラの咲く頃生まれた川に戻ってきます。川に戻ってきたサクラマスは秋に産卵するまで川の淵でほとんど餌をとらずに過ごします。

サクラマスには海に降りる降海型と、海に降りず一生を川で過ごす河川残留型があり、降海するものをサクラマス、河川に残るものをヤマメと呼びます。これらは外観的にも異なり、サクラマスは体が全体的に銀白色で、尾ビレと背ビレが黒いのが特徴です。一方、ヤマメは緑色を帯びた黄褐色で、体に小判型のパーマークがあり、大小の黒点があります（写真）。

青森県では、このサクラマスの資源維持回復のため、県内の老部川内水面漁協、追良瀬内水面漁協、川内町内水面漁協、奥入瀬川鮭鱒増殖漁協、大畑町漁協などで種苗生産を行い、毎年およそ30~50万尾のサクラマスを放流しています。当研究所ではサクラマスの放流後の成長や生残を明らかにするための追跡調査や、放流効果の高い種苗育成のための技術指導などを行っています。

今後、その調査結果やサクラマスに関するマメ知識をこの誌上で、順次お話していきたいと考えています。



写真 サクラマス 河川残留型（ヤマメ）

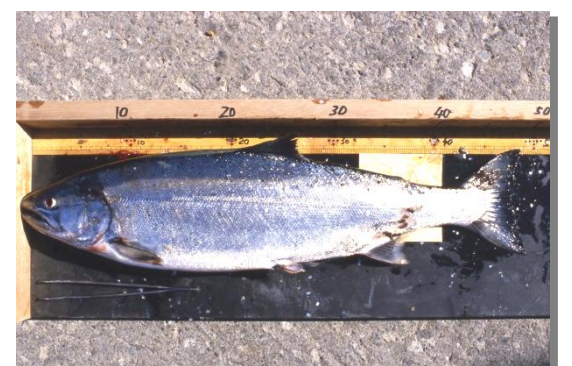


写真 サクラマス 降海型



平成 22 年度東北・北海道内水面試験研究連絡協議会開催

7月15日、16日の2日間にわたって青森市内の会場を使い平成22年度東北・北海道内水面試験研究連絡協議会を開催しました。毎年持ち回りで北海道、青森県、秋田県、岩手県、宮城県、山形県、福島県の1道6県の内水面試験研究機関が一堂に集まり管内の課題、懸案等の情報交換する場です。今年は青森県産業技術センター内水面研究所が幹事県として開催しました。

1日目は、全体会議として各県からの事例発表と、独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所内水面研究部北村部長から平成22年度中央水産研究所内水面研究部の研究開発課題、交付金プロジェクト実施課題別研究計画、平成22年度内水面漁業振興対策事業、平成22年度新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業採択等の情報提供を頂きました。

この後、場長分科会と専門分科会に分かれ協議が行われました。場長分科会では国及び水研センターに対する要望、全国湖沼河川養殖研究会理事会の報告、発表課題について協議が行われ、専門分科会では、各道県から協議課題に関する情報交換、平成21年度事業結果、平成22年事業計画、平成21年度魚病発生件数・概要と特徴について情報交換を行いました。

2日目は、協議課題に関する情報交換、両分科会からの報告、次期開催県（秋田県）の確認を行い協議会を閉会しました。（尾坂）



東北・北海道内水面試験研究連絡協議会

編集後記 100年の歴史の重みを感じた

今年の「奥入瀬神社例祭」 所長 尾坂 康

現在の内水面研究所は、明治34年に青森県水産試験場相坂鮭鱒人工孵化場として十和田市の相坂白上に設置されました。『青森県水産史』によると、この場所に設置されたのは、○ふ化室の床面より高所に源泉もしくは清流があること。○水質清澄にして鉱物の含有が少ないこと。○水温は暑寒ともに同一であること。○熟卵の親魚捕獲場が近いこと。○近くに水の交換が十分な養魚池が設置できる場所があること。これらの条件を満たしたのが、現在の内水面研究所の場所です。ふ化室、事務室2棟の建築物と養魚池3面を明治34年に竣工し、これに機械庫、餌料調餌室などを加えて明治35年に完成しました。明治35年に親魚捕獲の方法を改善する方策が講じられ、藤坂村、三本木村、法奥沢村の漁業者の申し合わせによって漁業組合がつくられました。これによって、青森県初めてのさけます人工ふ化用の鮭捕獲留が設置され、本格的なさけふ化放流が行われるようになります。明治36年6月16日に藤坂村を主とする組合が組織され8月18日付けで認可になりました。『鮭と刻んだ100年』奥入瀬川鮭鱒増殖漁業協同組合によると組合は、漁獲量が思わしくなく解散のやむなきに至りましたが、そのような状況下であって、苫米地熊次郎氏は相坂、藤坂部落の同志の賛意を得て明治40年に藤坂村漁業組合を設立し、明治43年から捕獲事業を継続しています。苫米地熊次郎氏はその後15年間組合長として終始一貫鮭鱒人工ふ化放流事業に尽力されました。昭和11年5月3日、苫米地熊次郎氏の功績を後世に伝えるため組合員によって功労碑、奥入瀬神社が建立され、5月3日を祭日として毎年遺徳を偲んでいます。

今年、偶然にも苫米地熊次郎氏のお孫さんがお見えになり、例祭参加者と一緒に記念写真を撮ることになりました。内水面研究所と地元漁協との100年の歴史を感じる例祭となりました。今年もサケマスが多く遡上することを祈念します。



（奥入瀬地区漁業協同組合協議会事務局 剣吉さん写真撮影）

4月から7月までの内水面研究所の主な行事

- | | | |
|----|--------|------------------------------------|
| 4月 | 1日 | 平成22年度内水面研究所内 辞令交付式（研究所） |
| | 2日 | 平成22年度財務及び予算事務説明会（県庁） |
| | 6日 | 上北元気支援事業打合せ（東北町） |
| | 7日 | 第1回所内全体会議（内水面研究所） |
| | 8日 | 県産あゆ資源・KHV事業打合せ（内水面研究所） |
| | 9日 | 平成21年度十三湖シジミ現存量調査報告会（五所川原市） |
| | 9日 | 第1回所長会議・第1回企画経営監合同会議（青森市） |
| | 16日 | 深浦町追良瀬川サクラマス放流式（深浦町） |
| | 16日 | 平成22年度青森県養鱒協会通常総会（十和田市） |
| | 19日 | 水産総研との懸案事項打合せ（内水面研究所） |
| | 19日 | 平成22年度第1回監視評価会議評価委員会（東京都） |
| | 22日 | 環境修復技術開発打合せ（八戸工業大学） |
| | 26日 | KHV湿潤調査打ち合わせ（東北町） |
| | 26日 | 温排水環境影響評価会議（青森市） |
| | 27日 | 県産アユ資源造成事業打合せ（鱒ヶ沢町） |
| | 28日 | 水産業普及指導員全体会議（青森市） |
| | 28日 | KHV湿潤調査打合せ（弘前市） |
| | 30日 | 奥入瀬クリーン対策協議会（十和田市） |
| | 30日 | 百石町漁協・奥入瀬川鮭鱒増殖漁協との合同会議（十和田市） |
| 5月 | 3日 | 奥入瀬神社例祭（内水面研究所） |
| | 10日 | 「水循環」協働活動展開事業打合せ（内水面研究所） |
| | 10日 | 国道河川整備事務所魚道検討委員就任打合せ（内水面研究所） |
| | 11日 | 日本海サクラマス資源再生事業打合せ（深浦町） |
| | 14日 | 「水循環」協働活動展開事業打合せ（十和田市） |
| | 14日 | 平成22年度青森県漁業士会通常総会・研修会（青森市） |
| | 19日 | 農商工連携セミナー（青森市） |
| | 19日 | ファーム月光の森との農商工連携事業打合せ（内水面研究所） |
| | 20日 | 小川原湖漁業振興対策打合せ（東北町） |
| | 20日 | 東通村老部川サクラマス放流式（東通村） |
| | 25日 | 小川原湖漁場環境保全研究会（東北町） |
| | 26日 | 脱臭試験打合せ（東北町） |
| | 26日 | 十和田湖振興対策打合せ（内水面研究所） |
| | 27日 | 内水面漁業振興打合せ（青森市） |
| | 26日 | アユ短日処理試験打合せ（鱒ヶ沢町） |
| | 28日 | 企業・生産事業者訪問委員会第1回会議（青森市） |
| | 31日 | 県財政課現地調査（内水面研究所） |
| 6月 | 1日 | 「賓陽塾」開講式（平内町） |
| | 7-18日 | 養殖衛生管理技術者本科基礎コース研修（東京都） |
| | 7日 | 津軽ダム工事事務所との打合せ（内水面研究所） |
| | 9日 | あおおり農商工連携助成事業打合せ（青森市） |
| | 10日 | 小川原湖トレーサビリティ検討委員会（東北町） |
| | 11日 | 脱臭試験打合せ（内水面研究所） |
| | 11日 | 賓陽塾生による施設見学（内水面研究所） |
| | 14日 | おいらせ町根岸堤外来魚駆除打合せ（内水面研究所） |
| | 14日 | 第2回研究推進委員会（平内町） |
| | 14日 | 独・東北区水産研究所とのさけます調査打ち合わせ（青森市） |
| | 14日 | 平成22年度さけます関係事業担当者会議（青森市） |
| | 16日 | 小川原湖漁場保全打合せ（東北町） |
| | 18日 | 十和田湖ひめます放流式（秋田県小坂町） |
| | 22日 | 全国養鱒技術協議会養殖技術部会（東京都） |
| | 22日 | 平成23年度予算編成に向けた水産関係機関打合せ（青森市） |
| | 24日 | シジミDNA4解析に係る打合せ（内水面研究所） |
| | 26日 | 小川原湖漁協第61回通常総会（東北町） |
| | 29日 | 脱臭試験打合せ（独日本原子力開発機構青森研究開発センター） |
| | 30日 | 第2回企業訪問委員会（青森市） |
| 7月 | 1日 | 東北町町長との小川原湖漁業振興意見交換（東北町） |
| | 4日 | 老部川内水面漁協創立50周年記念式典（東通村） |
| | 6-7日 | 全国水産試験場長会第3回役員会・地域水産試験研究振興協議会（東京都） |
| | 8-9日 | 第35回全国養鱒技術協議会（栃木県） |
| | 12日 | ホヤ新疾病対策協議会（平内町） |
| | 14日 | 県総務部長・財政課来所（内水面研究所） |
| | 15-16日 | 東北・北海道内水面試験研究連絡協議会（青森市） |
| | 16日 | 平成23年度予算編成に向けた水産関係機関打合せ（青森市） |
| | 23日 | 理事長との個別面談（内水面研究所） |
| | 26日 | 小川原湖漁業振興打合せ（東北町） |
| | 26日 | シジミ関連新規重点事業打合せ（青森市） |
| | 28日 | 第2回所内全体会議（内水面研究所） |
| | 29日 | 第2回所長会議（青森市） |
| | 29日 | 第71回十和田心交會（十和田市） |
| | 30日 | 上北管内中教研理科部会による視察・研修（内水面研究所） |
| | 30日 | 青森県水産振興審議会（青森市） |

